共立研究

東京基督教大学
共立基督教研究所
〒270-1347
千葉県印西市内野3丁目301-5-3
TEL. 0476 (46) 1137
FAX. 0476 (46) 1292

vol.IV　No.3　1999年3月31日

特集　神学と社会科学

本号には、1998年10月に世界宣教講座（東京キリスト教学園主催）で来日したサンダー・フリヒューン博士（アムステルダム自由大学社会哲学教授）の講義を二つ掲載する。「視点、世界観、構造」の講義で特に興味深いのは、神学者アブラハム・カイパー（1837-1920）の同時代人の社会学者マックス・ウエーバー（1864-1920）への言及であろう。両者ともに社会・政治生活において世界観の持つ役割の重要性を理解していた。しかし、カイパーはさらに学問の構築にも世界観が重要であることを強調したのに比べて、ウエーバーは学問の世界から極力、世界観を排除しようとした。いわゆる価値自由（価値中立）の提唱である。ウエーバーの「社会科学における価値自由」主張の根拠は当時の新カント派の認識論に従ったことにあった。今日の学問論において、自然科学ですら価値負荷的であることが言われている時、われわれは改めて学問論においてカイパーの先見性に注目する必要があろう。

公開講座　I　視点・世界観・構造
Perspectives, Worldviews, Structures

サンダー・フリフューン
福　田　敬　三　訳

緒言

キリスト者の学的研究の潮流である世界観アプローチに、焦点をあてて考察する。当然のことながら、宣教学および神学はキリスト教の洗練された学的研究を必要としており、その意味からして、この世界観アプローチの講義に価値を見出されることと確信する。東京キリスト教学園は、キリスト教高等教育機関の世界的ネットワークの一つであり、その教育機関としての目的とキリスト者の学的研究の目的とは一致することをつけ加えたい。

「視点」および「世界観」に関する簡潔な概観 (1) の後、その分野のアカデミックな世界における最近の発展を述べ、学生や研究者の方々のために「開示」および「閉示」についての概念 (2) をお話ししたい。その後、「地図作成」の隠喩を援用して世界観を再び論ずることにする (3) 。さらに、それぞれの世界観と世界観との間の衝突 (4)についてわずかながら言及する。関連して、マックス・ウェーバーとアブラハ

目　次

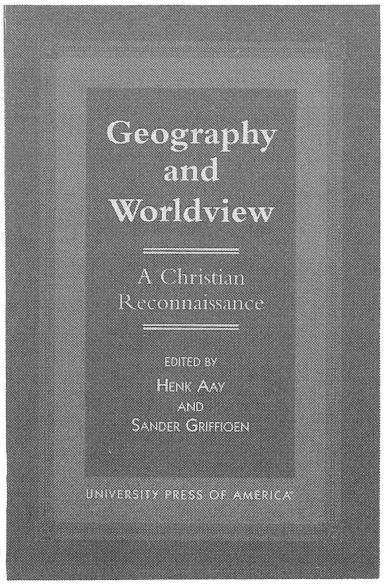
特集　神学と社会科学
公開講座Ⅰ　視点・世界観・構造
サンダー・フリフューン
福田敬三　訳
公開講座Ⅱ　ただ一つの道
サンダー・フリフューン
渡邉彰子　訳

ム・カイパーとの比較を行なう。ウェーバーはドイツの偉大な宗教社会学者であり、カイパーは牧会者、神学者、大学学長の責を負っている。最後に、再度、「地図のテーマ」(5)に戻って論ずる。

1．Perspectives - 視点

この10年の間、文化的思潮の大きな変化は、疑いもなく「多様性への寛容」である。先の時代は「一致」が理想であり、それは社会および政治分野、科学分野においても共通真理であった。当講義は学的研究が中心テーマであるので、アカデミックな世界がどのように多様性へと開示していったかを限定して述べる。

ここで重要な事柄は、「見ること、知覚すること」に対する新たな関心が起こっていることである。「見ること」が、かつて考えられていた以上にさらに複雑なものであることが証明されている。その関心の一つに、「何かを何かとして見る」(seeing as) という表現でしばしば記述されるが、一つの同一の現実に対して様々に異なった方法で見られ得るということである。例として水を取り上げてみよう。アラブ人とオランダ人とが、水に対していかに異なった理解をしているか。アラブ人は水を喉の渇きをいやすものと考え、オランダ人は堤防の内側に住む人々への脅威として見ている。



文中紹介書
"Geography and Worldview"

これに関連してよく使用される用語が、「視点(perspective)」である。特に社会科学および人文学においては、多様な視点を考慮にいれることは通常のこととなってきた。この視点への新たな強調は、世界観の概念に対する関心を回復させることとなった。世界観の概念はすでに知られて久しく、一世紀が経とうとしている。当初は改革派から、後に福音派で知られてきた。福音派では、James Sire 著の *The Universe Next Door* (1988) が、その特徴からして世界観の観点と完全に一致している。その著作では自然主義、唯美主義などのあらゆる種類の世界観が分析され、並行してキリスト教の世界観が構築されている。

世界観の概念は、世俗世界にその端を発する。世界観アプローチの先駆者の一人はマックス・ウェバーで、項目4で取り上げるが、世界観は今では社会科学や人文科学の主流として用いられることが少なくなってきた。しかし現在、視点への関心が高まりそれが「開示」を提供している。後に説明するが、世界観は視点の一般項目に属しながらも、視点が持たない別種の著しい特徴を有している。

世界観は視点の一般項目に属し、それは現実を知覚する方法に過ぎないかもしれない。一つの世界観は一つのものの見方を意味するが、それだけではなく他の特徴をも含む。世界観概念は、「視点」の一般的語義に対して（少なくとも）二つの特徴を付加する。その第一は、世界観は単にものを見る見方を表わすのではなく、「世界についての確かな信念」をも包含する。一つのそして同一のものを異なった見地から単に知覚するということよりも、さらにさまざまな世界観と世界観との間の問題であり、もっと正確に言えば、「ものそれ自体についてのさまざまな信念」の事柄なのである。

第二に、これらの信念は概して対立する。一つのそして同一のものに対する異なった見方が対立せず互いに補完し合う関係であってよいにもかかわらず、ひとたび同一のものに対する異なった信念を許容すると、次には、ものそれ自体の性質が問題となってくる。その後、それぞれの見方が互いに非補完的であることが明白となって、ある特定の世界観の包括的性質から、信念と信念との間の衝突は不可避であると考えることが必要となる。(p.125, Chap.8 *Perspectives, Worldviews, Structures,* "Geography and Worldview: A Christian Reconnaissance"University Press of America,1998)

世界観のテーマをさらに探求すると、常に二つの落とし穴に直面する。

ここには避けるべき二つの落とし穴がある。その一方は、世界観とは世界を見る単なる見方ととらえる傾向があること。他方は、今日の対立する信念がしばしば同一の尺度で比較できないので、通約不可能とされ、従って、生じている対立が解決し得ない、

勝者も敗者もない目に見えない対立とみなされることである。現代思潮の特質は、それをポストモダンと呼ぶ呼ばないに関わらず、その両方の傾向を持っている。異なった世界観がしばしば単なる個々の視点として縮小され、と同時に、異なった信念を考慮すると、それらは互いに通約不可能とみなされる傾向にある。多重文化主義に関する現実の論争では、その両方の姿勢が見られる。それぞれの文化グループ間の衝突を運命論的と解釈する文化的視点が、魅力あるものに見えてくる。

視点の相違に対して「窓」を小さくしたくない。人々が世界に対して異なった見方をすること自体はよいことである。科学者が現実を見る時、その見方が、たとえばタクシーの運転手とは異なっていてもよいのである。今日の関心事の一つに、「知覚における文化的要素の役割」への認識が高められていることである。たとえば、アラビア人の水に対する認識は、治水が生存を左右する中国人のそれとは異なる。また、同様に、オランダ人にとって、海は堤防の内側の生命への大きな脅威であるが、また、海外貿易の大きな可能性をもつ富の源としての意味もある。

このような文化的相違に関する事例を挙げればきりがない。しかしながら、単に視点に関するものより、世界観に関する事柄がより多くあげられる。後に説明するが、「地図作成の隠喩」(the metaphor of mapping) は、世界に対する信念の性質を適切に特徴づけるものである。世界観は、ある特定地域の根本的な特徴の地図を描く（がごとくに振る舞う）ので、従って、その地図からどの道を選択して進むべきかが提示される。この隠喩は、そのうちにある真理要求の特徴を理解する助けとなり、世界観が信頼性のある地図を提供するがごとくに振る舞う。そこで、衝突は、通約不可能な判断どうしの衝突として非合理的に理解するのではなく、識別できる対象に対するライバルどうしの要求であると捉えられる。

地図の隠喩をさらに進めると、二種類の世界観の間にある主要な相違が前面に出てくる。一方の世界観は、たとえば宇宙の性質の暗黙仮定などのように、多くが諸科学の実践に無条件に留まっている。この種の世界観は、伝統的にドイツ語では Weltbild (world picture 世界像) と表わされる。他方の世界観は、規範的でしばしば予め定められたものに追従する機能を有した、一般的に Weltanschauung (世界観) と呼ばれるものである。Weltbild (世界像) は、聖書記者のもつ世界像について言及する時などのように非常に目立たないかもしれないが、概して、この種の世界観は重要な先導的役割を果たす、と私は主張したい。たとえば、いわゆる科学的世界観が西洋の世俗化に主要な役割を担ってきた証拠は豊富にあるが、科学的結果の適用を通し、暗黙の Weltbild (世界像) は伝統的宗教を犠牲にして、日常生活に新たな根元を見出したのである。

この二種類の世界観は相互にも関連付けられる。その例として、Weltbild (世界像) が規範的役割を受け、Weltanschauung (世界観) として十分な機能を開始するケースが多く見出せる。これは、いわゆる科学的世界観においてしばしば起こることである。(前掲書、pp.126-7)

2.「開示」および「閉示」

「一致」という理想は長い間、優勢を占めてきた。その大いなる理想が統一科学であって、客観的知識の土台に建て上げられた理論の体系である。

その状況は今や徹底的に変わっている。客観的で一貫した知識の理想は、迫力を失っている。今日、さまざまな分野の学者たちが、「世界はどのようであるか、人生を意味あるものとするものは何か」というような、より広いビジョンによって彼らの研究が導かれている、と公言することが珍しくなくなってきた。そのような告白が、学的研究での宗教の回復を自ずと暗示してはいないが、今や前科学時代に属するものと考えて宗教を安易に棄却するような態度は、過去のものとなった。熱烈な無神論者だけが、科学技術を宗教的信念の代替と見ているが、その主張はもはや一致していない。積極的面に転じると、世界観に関する事柄を深刻に受けとめたいとする動きが大きくなりつつあって、明確にキリスト者の見地でアプローチすることが可能となっている。

数年前、オランダの物理学者 Arie Van den Beukel が、さまざまな科学的世界観に対して、キリスト者の現実理解を強く擁護する一冊の書籍を出版した。彼自身も驚いているが、この書籍は版を重ねている。折にふれ彼自身が認めるところであるが、デルフト工科大学（Technological Unversity of Delft）の同僚たちのその本に対する態度が予想に反していた。彼は、その本が原因で彼の科学者としての名声が崩壊してしまうのではと考えていたが、事実はその逆で、その研究を続けるようにと励ましさえ受けたのである。

多元主義が、当然のこととして広く受けとめられていることは注目に値する。いかなる事柄においても視点の多様性を認めることが、今日の知恵と受け留められている。もし、世界観アプローチが、現在、優勢であることが真ならば、それは多元的形態においてのみ有効であることを意味する。今日、規範的世界観なるものは存在しない。これはもう常識となっている。しかし、なぜそのような多元性を「開示」に関連付けるかというと、多元性を認めることはすなわち、「いかなるコストを払っても一致に到達する」という強迫観念から私たちを自由にするからである。統一科学の理想は、「科学は一致を促進する」という、まさにこの仮定の上に築き上げられていることを心にとどめておく必要がある。宗教は分裂させ、科学は統一させる。どこに分裂を克服する力の源を求めるか。その答えは、もちろん、客観的知識こそが疑問の余地のない知識であって、客観的知識は、移り変わりやすい意見や不和を生じる信条から解放されているとする。決して忘れてはならないが、この前提においてのみ、科学が啓蒙主義の思想家の手にある切り札となり得たのである。この関係を理解した時にはじめて、多元主義を認めるということはどういうことかを理解することができる。まさに視点の多様性は、啓蒙主義が最も深く切望する事柄と対立しているのである。

Closures（閉示）

現代の思潮環境に由来する「閉示」を簡潔に考察する。ポストモダン思想は、一方の手が与えたものを他方の手で取る、そのような異教の神々に似ている。それは、確かに統一への強迫観念から学問を解放するが、現実の多元性を克服する道を示すことができず、それ故に新たな形の捕らわれの状態へと移ることになってしまう。その利点は、論理的思考のナラティブ（物語）様式 (narrative mode) の擁護であり、そうすることによって理論的論述が意味の探求を行なうことを可能にした。にもかかわらず、同時に、ポストモダン思想はそのナラティブに代わって為されるいかなる真理要求に関しても、相対主義への門を広く開けることになるのである。よく知られていることであるが、メタナラティブ (metanarrative)（リオタールの定式）への不信は、ポストモダンの標準的定義となった。この不信とは、信じることに対する拒否であり、それは信じることに対する無能力さと同等である。ポストモダン思想家は過去の総括的総合、たとえばデイビッド・レイがその章で述べていることに関する総括的プロジェクトには、いかなる希望を置くことを拒否する。その総括的プロジェクトの目指す一致のために、人間のもつ感情、肉体、および女性差別から始まり、社会制度の中の貧者に至るまで、その目標に合致しない要素を切捨てまたはその影響を最小にするために支払った犠牲を、彼らは良く知っている。このすべては周知のことである。しかしながら、何が公共の目に依然と隠蔽されているかというと、この不信はメタナラティブの真理要求に対する深い不可知論的姿勢から発しているということである。その特徴において、ポストモダンの気風を理解する鍵として最近、遊牧民の隠喩が定評を得てきた。それは、遊牧民が伝統から伝統へと歩んでいくなかで、特定の物語に深く関わりを持つことをしない様をイメージしている。このようにして、伝統が、「その内に生きている」特定のものに代わって選択自由なものとなり、ナラティブが単なる物語となってしまう。よって、真理を要求することや主観を超えようと専念しなくなる。

メタナラティブは、すべての事柄を適切に包含する言葉使いではない。というのは、それは二つの語が混交して一つの語となった用語で、さらに注意深く分析して識別すべき様々な要素を包含しているからである。ある特定の文化は、その共有する歴史、習慣、制度様式、価値、世界観の観点から分析される場合があるが、しかし、少なからずというより最終的には、それは信念の事柄である。ナラティブ・アプローチは、潜在的にこれらの要素全てを包含する。そのことから、視点はそれらすべてを代表することはないとしても、常に重要な部分を占める。もし分離されるならば、視点は好みによって採用されたり棄却されたりする単なる体系になってしまう。ここで見落とされていることは何かというと、そのような視点と世界に関する特定の信念との関係である。この「信念」という語は、その意味において注目すべき事柄を含んでいる。世界観を採用することは、それが無言また表明されるを問わず、世界がどのようなものであり、生活のさまざまな領域がどのように緊密に結びついているかの事柄において、同意することを包含している。この信頼してよいであろう方法は、世界観が採用される特定の方法にだけ関連する事柄の代わりに、世界観それ自体に従属すると、私は主張する。内面の同意が欠ける場合には、代替

可能な視点が多様に存在する結果となってしまう。ここに、相対主義および視点中心主義の両方が特徴づけられる状況が表われるのである。本質的意味を人に与えない、視点のもつ代替特性の故に、また個々の視点が「窓のない個体」となってしまう理由から、そこでは相対主義が視点中心主義に優先する。(前掲書、pp.127-128)

視点の現実はそれが最終的地平となるところに危険性がある。これが諸科学で発生する場合にどうなるであろうか。未信者への伝道において知られている状況であるが、伝道されることへの応答に、「それはあなたの視点であって、あなたにとって重要であると理解できるし、それを尊敬します。それはそれでよろしいのではないですか。ただ、私はこの事柄に対して別の視点を持っています」という、一見礼儀正しい言い方がある。この丁重な、しかし安っぽい言い方によって、異なった視点との論争に入ろうとしないのである。科学分野で、この状況が多く見られるようになっている。スリランカで研究を続けている私の同僚が、彼の著作の中で、「同一の事柄にスポットを当てて研究しながらも、研究者の結論が全く異なることがあっても不思議はない」と主張する。ここに真理論争はない。このことから先の伝道の現場での出来事を理解して頂けることと思う。

3．様々な地図

地図作りのメタファーは、世界観の方位的特性を正しく理解するのに最適である。世界観は、人生の入り組んだ複雑さを通して、信頼できる方法を提示するものと思える。この地図に関連して、二種類の世界観（世界像および厳格な意味における世界観）の間の特徴を考慮する必要がある。、それに応じて、現在の目的に沿って、二種類の地図の差異を比較する。

一方、世界観は、通常、それが世界観だと認識されることなく保たれ、また隠されることなく、文化人類学者や他の科学者たちによって発掘される。クリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）の引用定義は、このタイプの地図を参照している。この種の世界観は、定式化され、それがそれだと議論されて世代から世代に伝達されるというよりはむしろ、教育、儀式、物語の語りを通して伝達される。その結果、この種の地図には、私が識別したい明瞭で完成された世界観として明確に認識できない。ここで二番目のタイプに関連し、信念と同様に、ある特定の態度の根底にある自覚に言及することは意味がある。さまざまな言語において（たとえば、ドイツ語とオランダ語）、これらのタイプの差異は二つの異なった概念に相当する。第一のタイプを表わすドイツ語はWeltbild（世界像）であり、二番目はWeltanschauung（世界観）である。実際に、その差異は常に明確でなく、研究者たちの見解によって異なる。その適例として、ハイデッガーは、有名な世界観の時代に関するエッセーで Weltbild を好んで用いたが、実際は近代をより適切に特徴づけるのはWeltanschauung (世界観) である。もちろん、その二つの語の両方を好まず、その代用として同意語を採用した研究者たちもいた。その適例はフォエゲリン(Voegelin) で、知的と非知的自己解釈との間の区別が挙げられる。(知的と訳される noetic は、ギリシャ語 nous 精神を表わす語を起源とする。）その後者の形式は、上記のWeltbild（世界像）概念に適合している。フォエゲリンは、秩序について社会が経験し表現するものを通して、シンボルを考察すべきことを提言する。そのシンボルは、伝統社会において神話であったり、イスラエルでは啓示であったり、近代においてはイデオロギーであったりする。そのシンボルの共通点は、自明ではないということである。"社会の本質的な自己解釈が知的である社会は存在しない"（フォエゲリン 1990）と主張する。逆に、知的解釈は、非現実的な個人およびそれによって鼓舞される社会でのみ見出される明瞭さの段階を暗示する。

これら二つのタイプの地図にある差異は、文化的多元主義に関連する相違を考慮に入れる場合に、さらに興味深いものになる。一般に、Weltbild の意味合いの世界観は、通時的順序で提示される。時が来て、中世の人々がルネッサンスにその席を譲るところに、典型的な世界像の相違を見ることができる。これらの像は互いに反目し合い、移行期間では衝突が起こりやすく、文化と文化との境界において対立が起こる。関連する例として、東洋世界に近代物理が導入された時、東洋と西洋の宇宙に関する概念との間にあった衝突が挙げられる。ニーダハム(Needham) は、その広範に影響を与えた『中国における科学と文明（*Science and Civilization in China*）』のシリーズで、中国の学者たちが、その微妙な定性的主張のすべてにわたって、ニュートンの均質宇宙に関する概念と同等なものを持っていなかったこと

を示した。興味深いことに、1870年代と1880年代の日本の近代化の結果、宇宙と境界の認識と概念に関して同様の衝突が、日本と中国との間で展開した(Howland 1996)。Weltanschauung（世界観）の衝突は、容易に引き起こされる。一つの文化または時代において世界観は常に多数見られるだけでなく、それらが明示的であるが故に衝突が表面化する。マックス・ウェーバーは世界観概念を哲学的権威にまで高めた初期の一人であるが、公開の論述に世界観を導入することの意味は何かを"世界観の闘争"で系統立てて提示し、それが近代文化の重要な論争となった。(前掲書、pp.130 - 131)

他の定義は私が示したものとは完全に並行しないが、順序正しく整えられている。その意味するところは、世界観が理論に関して機能し、他は社会的動向と政治団体に関して機能するという相違である。

Max Weber

Weltanschauung（世界観）を形成させた最も大きな影響力は、社会的動向である。共産主義から保守主義までの全範囲にわたって、世界観は宣伝的目的だけでなく、その指針に対する真実の必要があったので、助長されてきた。(前掲書、p.131)

共産主義、社会主義、自由主義、保守主義の全ては、個々の世界観を持っていた。それらの教育プログラムでは、基本的に世界観をどのように捉えるかが重要視されていた。何年も前、私が学生の頃、精神医療クリニックで働いていた時、患者の中に社会主義者の老紳士がいた。彼は社会主義の根本原理を保ち、生活の全領域にそれらを適用しようとしていた。私自身はカルヴィン派の家庭で育てられたが、この男性と接することに困難はなかった。

社会的動向は、その広さおよび深さにおいてその世界観を喪失してしまった。同様に、政治団体は、平行線をたどるということがもはや無くなってしまった。異なった理由によるが、米国でも同様のことが起こっている。ヨーロッパでは、世界観の消滅が大変動の原因となっている。ご存知の通り、「大きな物語の終焉」は、フランス人でポストモダン社会哲学者ジャン・フランソワ・リオタールの最もよく知られたスローガンの一つである。私は彼の診断にいくらか同意しながら、伝統的世界観が廃れかかっていると結論するところに関心がある。現在は、視点だけが関与していると考えられている。

実際のところ、科学は十分に成熟した世界観が存在することを示すことはできるだろうか。学者の日常的な研究では、仮定、仮説、方策、および他から借用した概念の寄せ集めを見出し、「大いなる物語」や「世界の見方」というような取扱いをするのではなく、むしろ限られた目的のために単に寄せ集めるというところではなかろうか。そもそもメタナラティブは、通常理論を適切に明示するだろうか。ハーバーマスほどポストモダンを代表する人はいないが、彼は、諸科学は自然と歴史の全世界的解釈に対してさらに控え目な立場を取るべきであると主張するが、地理学はその例外なのだろうか。

これらの異議に対する回答として、まずそこにある誤解から論証する。たとえば地理学と世界観のテーマは、完全な世界観がいかなる文化脈にも明確に存在し、我々が分析するのをただ待っている状態にあるということを意味しない。通例として、世界観は自ら明るみに出るというものではなく、議論を拡張し推進する努力の後、目に見えるものとされるものである。このために、想像的な解釈が必要とされる。別の見方をすれば、世界観の分析は単なる観察の事柄ではなく、常に想像的解釈を要する事柄である。必要とされるものは、容易に得られる事柄を超えていく診断である。（前掲書、pp.132-133）

4．ウェーバーとカイパー

もし、世界観は主張を伴うことが真ならば、同様に、世界観と世界観との間で、まさに現実の事柄に関して競合し合うことも真となる。この点はいつも明確にされない。世界観の衝突は、通約不可能な視点と視点との間にあって、進行し終わりのない争いとしてしばしば関連付けられる。マックス・ウェーバー (1864-1920) は、この暗示に重要な役割を負っている。彼は、どちらかの消滅という結果を伴う霊的

な戦いとして、世界観と世界観との間の相克を提示した。キリスト教は今日、その保ってきたものを失いつつある。古き異教の神々どうしの永遠の争いは、現代では大きな社会的および政治的動向での理想と呼ばれる神々に取って代わられることになる、と彼は考えていた。

「かつて多くの神々は、その魔力を失って非人格的な力となりながら、しかもその墓から立ちあらわれて、われわれの生活への支配を求めて再びその永遠の争いを始めている」(ウェーバー『職業としての学問』(岩波文庫版) p. 56)。

この争いを歓迎する立場がウェーバーにはあったにもかかわらず、彼は科学の中立を擁護した。彼は政治的生活を霊の戦いとして見ており、ここに中立を主張する余地を残さなかった。にもかかわらず、学者としての彼は、科学がその権威を失うことを恐れ、世界観を大学での学際的研究の対象外に止めようとした。このように、社会科学に関して、客観性を最も厳密なものとして堅く保った。第一次世界大戦後の状況下、学生たちは伝統的価値崩壊の真っ只中にある状態で、科学的客観性に立つ教授たる者は良い生活の処方箋を提供すべきでないと主張しつつ、彼は世界観を主題とする彼の講義を全て禁止した。社会科学は価値観から禁欲的に遠ざかる必要があるものと規定した。その時にこそ、公平な仲裁者と成りうるとものと考えていたのである。

Abraham Kuyper

ウェーバーの多元主義への二元的姿勢は、大学での余りにも一般的な、精神分裂症的症状を表わしている。現在のウェーバー主義者たちに対して、自由で学際的探求を行なう学問を、存在する権力に明け渡すことになってしまう致命的欲求があることを警告できる。問われるべきことは、ウェーバーと彼の後継者たちが真理要求の仮説としての世界観を考察できなかったことにむしろ問題があるのではなかろうか。ウェーバーの見方からすると、これに関する唯一の要求は力への要求である。仮に、世界観の権力的局面を無視することはできないとしても、世界観の性格からして、それが私たちの人生に対して力を得ようとすることをウェーバーは明確に見ていた。しかし、人間の同意なしに世界観が力を産出できたであろうか。納得させるための議論がなくて、どのようにして同意を得ようとするのか。

このディスカッションで問題なのは、世界観が深さにおいて、神話およびイデオロギーと同様に分類される目に見えない力であるかどうか、または、それとは反対に、ある事柄の特定の状況に対して議論を訴えて、隷属化することができる唯一の力であるかどうか、である。二番目の立場は、カイパーと彼の後継者たちの主張である。アブラハム・カイパー (1837-1920) は、彼の時代に先んじて、ポストモダン哲学者として紹介された。ある意味において、ウェーバーこそそのタイトルにふさわしいと考えられる。興味深いことであるが、カイパーが首相になった時、彼の大学改革に関するニュースを、ウェーバーはかなりの関心を持って注視していた (フリフューン 1994)。にもかかわらず、結論のない論争にみるウェーバー自身の考えは、ポストモダンの視点中心主義に傾倒していき、カイパーの立場とは違う。後者は、世界観の論争は勝者と敗者のいる論戦と理解している。カイパーは、キリスト教世界観こそ、この競争に勝利を得る力があると、高い期待をおいていた。何が彼をしてそのように自信を持たせたか。彼は、キリスト教世界観こそ、現実の全領域における意味ある視点を提供できると確信していたからである。そこで、その競争は全的な見方と見方との間のもの、偉大主義 (greatism) に関するものとなり、キリスト教世界観 (カルヴィン主義およびロマン主義)、近代主義、新・旧形態の異教主義が挙げられる。カイパーの主張は真に統合的視点を提供するものであり、単に神学および哲学のみならず、科学、さらに大きな範囲の文化をも包含するものである。彼の告白の中心的主張は、現実のどんなに小さな範囲でさえ、闇の王国とキリストの王国との相克から除外されることがない、ということである。このビジョンは (ネオ) カルヴィニズムの環境をさらに超えて、影響を及ぼしている。ジョージ・マーズデンが、「カイペリアン(Kuyperian)、前提

主義と概して呼ばれるそれは、福音的コミュニティーで勝利するもしくはそれに近い」と言っているのはあながち大げさではいない。(前掲書、pp.133-135)

5．控え目な真理要求

私自身のカイペリアンとしての伝統は、系統だった理論構成における真理要求を恐れないことである。私はカイペリアンとして、福音主義の方々が世界観を主張することに余りに控え目なので、学的研究へ実際的アプローチが容易に結びつかない状況であると、しばしば感じている。この二つの立場は、必ずしも反目し合ってはいないことを提示する方法があると考える。

「地図」のトピックに戻って考えよう。20 数年前、「世界史の時代地図 (*Times Atlas of World History*, Geoffrey Berraclough 主筆)」が出版された。その地図の描かれている手法は、通常知られているものと異なっている。あるところではヨーロッパがアフリカの付録として描かれ、また北アメリカが南アメリカの付録のように描かれている。しかしながら、その地図は信頼に足るものであって、誤ってはない。言いたいことは、いかに信頼できるものであるかに関係なく、地図はある特定の、それ故に相対的な視点から常に描出されるということである。これを避ける唯一の方法は、現実世界と一致する地図を作ること以外にない。私が軍隊にいた時、一人の軍曹から地図読解の講義を受けた。この軍曹は、その講義の冒頭で、「地図上の各点間の距離は、実サイズではなく縮小されている」と語った。彼はそこに、(「不思議の国のアリス」に類似する) 一貫性のない矛盾を感じていた。

実際の地図の場合、二つの特質が一つにされる。信頼性のない地図など誰も求めることはしないし、そこには真理を具現化しようとする強い要求がある。にもかかわらず、そこには常に、ある特定の視点に基づいて描出されるという現実がある。もちろん、世界観は依然として視点であることに変わりはない。福音主義の人々は、真理への強い要求を余儀なく続けている改革派の学者たちを必要とし、と同時に、改革派の人々は、「自分の影を飛び越えることができない」という事実に心を留め、謙虚さの模範として福音派の学者たちを必要としている。互いが文化間の交流を必要としており、かつてヨーロッパまたは北アメリカが世界の地図作りの視点として考えられていた事実を知る必要がある。

8-14 頁は著作権許諾の関係で非公開としています。
ご了承ください。

＊「共立研究」は年３回発行、定期購読料は年間500円（郵送料含）です。購読ご希望の方は、研究所までご連絡ください。

共立基督教研究所

「共立研究」

発行人　稲垣久和
編集人　渡邉彰子